

眞生

第八卷 第十號

□ 愈秋も深くなりかけた。稻の穂も黄金の波を打ち、あちこちの梨や柿も色づいた。氣候も一年の中では此の上もない上時節。遊ぶにも働くにも此の頃の秋位私共に都合のよい時はない。

□ 然に實際の社會は到る處に行き詰りのやうだ。窮すれば通ずるの譬もあるが此の分では窮しても尙通ずるの道が無さうだ。それは一体どこからかうもなるのであらうか。

□ 今春の事だつた、我國の國會では思想、經濟、外交の三つを國難として決議した。そしてまた、國民の中誰一人として之に反對する人も無かつた。

□ けれども、その爲めに果してこれだけの國難が去つたのか、そこには何等の効果もなかつたではないか。それもそのはず、一國の國難が國會の決議で去るべきものではないからである。

□ 經濟の上にも、思想の上にも、はたまた外交の問題にも議會は之をいかにすべきかを議せなかつた。そしてまた前内閣はそれに對して何等の新しい方法も講じなかつた。

□ 之では眞實の世界が開けやうはずがない。而も今日の社會は殆ど協調を欠いてゐる。國と國、人と人、親子、夫婦、資本家と勞働者、地主と小作人、世は悉く、相反き相打つの有様である。

□ 吾人道友たるもの大いに考ふべき秋ではあるまいか。

(念)

第二の在家

目次

第二の在家	梶子
生の目覚め	梶子
厭欣心に就て	土屋觀道
讀書雜感	土屋觀道
兎の一生	東光生
吾朋便り	

座敷で二人が對座して話して居りました。

「それでは一度見て下さいませ」

「ハイ一度見せて頂きますせう」

さ、客人は立ち上がられました。そして立ち上かるなり、火鉢の炭火を灰で埋め、自分の敷いてゐた座蒲團をチンと行儀よく直してから連いて來られました。此の人は古文書を調査に來られた要路の人です。流石に私は教養のある方だと感心しました。

僅かな事にも精漏のない、常に氣配りの出来てゐることが信仰であると思ひます。而かもそれが、如來の大道から割り出されて、氣附かされてゐるときに、い

くら醜俗な事をやつてゐても、其ま、光つた「如來の行」であります。

そんな俗な風をして居ようが、そんな俗な事をして居ようが、その裏心に「如來様の心から此の事をやらして貰ふのだ」といふ、魂が眼を開いてゐたら、假令高利貸をしてゐようが、娼妓をしてゐようが、胸中晴れ渡つたような氣持であります。身分の尊いのが尊いのでなく、仕事の美しいのが美しいのであります。響る醜惡に伴つて醜惡に入り、然かも醜惡に染まらずして、醜惡を淨化するものが欲しいのであります。それが眞實の「如來の働き」であります。

漁師となつて魚を拾ひ乍ら歩いてみえる觀音様、愛慾の權化となつて、愛慾の者を引導してみえる愛染明王を拜がむさき、本當に心から頭が下がります。大聖却つて市に隠れるといふ大聖になりたいと思ひます。在家より出家した出家者が、もう一度「出家の出家」して在家に還つた「第二の在家」が欲しいのであります。

一錢一枚をも吝しまなくなつた者が、此度は如來様のお慈悲からこそ、一錢一枚が惜しくなつた生活の信仰になりたと思ひます。常に抛け出してゐる一生だが、此一生も如來様の御指圖ならからこそ、八十までも九十までも働いて打ち倒れたい氣がします。(梶)

生の目覚め

私の舊い友達で、財産家の一人息子として榮耀榮華で暮らして、來て専門學校を出てから一時大商店へ就職しましたが、それも遊んでゐる代りにさいふノッキなお勤めだから、其間色々女々關係したり、遊んだりして、終に今度自殺しました。

私は茲二三年の内に、その友さ一度でも逢へる機会があつたなら、何かは意見の交換も出來て、或はこんな事もなくて済んだかも知れぬと、今更らながら残念に思はれます。

私達は「生きて居り乍ら」その生を軽く見て居ります。「生命が有るから生きてゆくのだ」位に平氣に考へて居ります。けれども私達が生きて居れるさいふこそ、生きて行けるさいふこそは重大なる事だと思ひます。

成程私達が生活して行くが爲めには、後から／＼金が要ること計りで大變だと、云ふ人もあるが、私の謂ふ意味はさう云ふ意味ばかりではありませぬ。私達が生きて居れるのは、私達を生かして置かんならぬと必要を感じて、生かして置いて下さるのだと思ひます。だから私の勝手に活きてゐるのではなく、如來さまに活かされて生きてゐるのだと思ひます。

だから如來さまは私を生かして置いて、思ふ存分御自身の考へを私にさせようとしてみえららしいのです。自分自身に手を下される代りに、私を使つて思切りの理想を此の世に示さうとしてみえるのです。如來様は御自身姿を現はしてみえぬが、あらゆる物となつて、あらゆる力となつて其全部を顯はしてみえます。だから私にも如來様が現はれてゐられるのです。又一層御自身の意志を顯彰せよとしてゐられます。だから「私の生」は私のものであつて私の物でない。實に重大なものです。無限大なものが孕んでゐるし、その無限大が今や刻々發現して居ります。

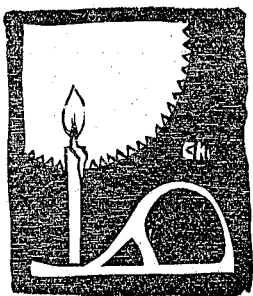
此の事があるのを、生きて居り乍らウツカリしてゐて少しも氣がつかぬ、そして金の無い者は生計苦のために生活を呪つたり、金の有る者は享樂と放縱に身を持し崩して、淫いた／＼をやつてゐることは、ごらも間違ひであります。身の苦しみ位がされ丈の苦しみです。身の樂しみ位がされ丈の樂しみでせう。此の眞の「生かされる」意義を知らぬ者は生きてゐながら活きてゐるではありません。

此の生かされてゐる上で、旨い物の喰べれる人間さ、旨い物の喰べれぬ人間の相違はあるが、等しく如來様に惹かれてゐる点に就ては相違がありません。小さい不平や、小さい陶酔から醒めてよるしく此の「生の第一義」に徹すべきだと思ひます。そして下駄直してあらうと、新聞配達であらうと、眞底から、ナル氣でやつて行きたいと思ひます。そこに金錢以上の「人生の價値」があります。(梶子)

厭欣心に就て

—(浄土教徒の反省)—

土 屋 觀 道



一 厭欣の字義

○厭欣心とは詳しく云へば厭離穢土欣求淨土と云ふことで、それを略した言葉である。而も之は淨土宗では總安心と云つて、淨土宗の信者としてはなくてはならない一つの信仰要件である。

○その意味は厭離穢土とは此の穢土を厭離すると云ふことであり、欣求淨土とは彌陀の淨土を欣求すると云ふことであつて、つまり此の世を厭い捨て、彌陀の淨土を欣び求むると云ふ信仰心を云ふのである。

○云いかへれば此の世は、私利と私慾の世界であり、何一つとして眞に信頼するに足る世界でない、一切が不淨で穢れた世界である。そんないやな世界だから之を厭い離れると云ふのが厭離穢土と云ふ意味である。

○之に對して、佛の世界は清淨な世界である、何一つまゝならぬこととはない。一切が自由にして楽しい世界である。すべてが清淨な世界であると云ふ意味から之を淨土と云つた。そして、かゝる即

ち清淨な國土であると云ふところから、之を欣び求めると云ふのが欣求淨土と云ふことである。

二 世間の誤解

○然に實際には此の厭欣心と云ふことが色々に解釋せられて、非常にまちまちであり、又一面から云ふと、それが非常に誤解せられてゐるのである。

○それは何せかと云へば、佛敎で云ふところの穢土と云い淨土と云ふことが、多くの場合、此の世の人々に充分に解せられてゐない爲めに、それがともすれば否殆と云つてよいほどにその凡てが自分勝手な解釋によつてそれが見られてゐるからである。

○従て、嚴密な意味で云へば今日の多くの人々は其の大部分が此の厭欣心を間違つた意味に解釋してゐるかと思ふ。従つて今日のやうな私利と私慾の生活にのみ生きて、どこまでも此の世に執着を持つうとする人々が眞の淨土教徒とまらないのも無理がない。

○乍然、それならば昔のやうに淨土敎の盛な時代には果して厭欣心の正しい人ばかりであつたかと云ふに、今から考へればそれも嚴密な意味から云へば随分あやまつたものであつて、本當の淨土を願ふ人々は幾人あつたか疑問である。

○何故かと云へばそれらの人々は多くの場合、自分だけには厭離穢土欣求淨土の心のつもりであるが其の實は眞の厭離穢土でもなければ欣求淨土でもないと思はれる點が多いからである。

○即ちそれは多くの場合、自分が此の世を厭ふと云ふのも本當の意味に於て、佛敎の穢土でなく、又欣求淨土と云ふこともその實は反つて凡俗の穢土を求めてゐたからである。

○して見ると、昔の人の淨土と云ふのも、その中の五三を除けば恐くは全く眞の穢土も淨土も判らぬ

人が多かつた。

三 時代の誤り

○然は眞の穢土とはどんな所であり、眞の淨土とはいかなるところであるだらうか。それは云ふまでもなく、佛教で教ゆるところの眞の穢土であり淨土でなくてはならぬことはもとよりだ。

○然に昔の人たちは、否現に今日の人たちも、その中の大部は穢土も淨土も知らないでゐる。而もそれは多くの場合、穢土のことを此の土といひ、此の土のことを穢土と云ふことを、たゞ單に此の世の現象即ち此の現實の世界、大自然までも穢土であると云つてゐるかと思つてゐる。

○然に佛教で云ふ此の土と云ふことは、普通佛教徒以外の人の見た此の土と云ふ此の土とは非常に其の意味が異てゐると云ふことを知らねばならぬ。

○言はず佛教で使ふ言葉と佛教以外の普通人の使ふ言葉とがその意味に於て可成りの相違があることを知らぬところから、いつしかかうした誤りがでゝきたのだ。

四 佛教の穢土

○今佛教で云ふところの穢土と云ふのはどんな處を云ふかと云ふに、一体此の世界と云ふものは、其の實各人各位の世界であつて、その見る人によつて其の世界が異つてゐると云ふのである。

○嚴密に之を云へば各人の住つてゐる世界、即ち各自の心に意識されてゐる世界と云ふものは全じ一つのものでも其の人の見る程度によつて、其の見える所が異つてゐる。たとへば一つの川の水を眺め

ても、お金の欲しい人にはそれが水力電氣にでもしたらよからうと云ふに見えたり、或は山からこへ木材でも運んだらよからうとか、或は之を水田に引いたらよからうとか、或はその他色々金儲けの方面に見えるであらうし、又それが藝術家の眼には自然の美しい景色としてその風光が見えるであらうし、又宗教家の眼にはそれが如來の風光として現はれて見えるやうに。

○即ち同じ一つの川水についても其の人の望みや考へと云ふものが其の人の意欲の如何によつて色々異つて來るのであるが、それが大別しては地獄餓鬼畜生等から乃至佛界に至る十界として現はれると云ふの佛教の世界觀である。

○従つて多くの人々は此の世の中を自分が見てゐるやうに人も見てゐると思ふのが常であるが、其の實は皆其の人の境涯に應じて異つてゐるとする。それも共業感と云つて同じ共通の所感の點もないではないが、多くの場合は違つてゐる。

○従つて其の共通の点のみがお互に意志が通じ、又同感に訴えることもできるのであり、又お互に推察することもできるに過ぎない。

○ところが此の十界の中で地獄餓鬼畜生修羅人間天上の六界は所謂之を六凡の世界と云つて、其の境涯が悉く凡夫相對の境涯であつて、その境涯に住つてゐるものゝ心境は全く煩惱の生活であつて、佛陀の生活に比べては全くあさましい生活である。

○之を佛陀の汚れない土國に比べて穢土と云ふのである。而も多くの人間世界はすべてがまゝならぬ世界であり、自由のできない世界であり、忍んで行かねばならぬ世界と云ふことから之を忍土即ち娑婆界ともいふのである。

○然に私共の生活は住めば都と昔から云つてゐる譬へのやうに、自分の心があさましい間は反つてそのあさましいやうな生活の充される生活を好み、又さうした私欲の境涯を以つて反つて結構な世界だ

と感ずるのが當である。従つてその充たされないやうな世界をこそいやな世界、あさましい所だと思ふのが凡夫の常である。

○だから多くの人たちは反つて凡夫の生活を極樂と思ひ煩惱の充たされる世界を反つて淨土だと思ひ違ふ人が多いのであつて、十中の八九中々にそれを厭ふて離れて眞の佛土即ち如來の淨土を求むると云ふことは困難なことである。

五 佛教の淨土

○然に佛教で云ふ所の淨土とは即ち十界の中では佛の住する所を云ふのであつて、煩惱を斷じた世界である。即ち一切の苦惱を絶した、絶對の境地であつて、宇宙の眞相に透徹した人々の心境にのみ現はれる世界である。

○従つて眞に醒めたる人々にはどうして、こゝまで來なくては安心ができないが、私共の本心の世界も亦こゝにあるのである。所謂眞如法性の靈界は、一切萬有の本源であつて、私共の心の古郷がまたこゝである。だから、一切はこゝから出て又こゝに歸らねば止まぬのが本當であるけれども、未だ迷へる人々にはそれが本當に判らぬので、多くはこゝまで來れずにある。

○だから一切の諸佛は自ら此の宇宙の本源に醒めると同時に一切の衆生をしてこゝの天地にまで到らしめやうとするのが即ちその願いである。従つて一切の如來の説法は要すに一切の衆生をしてこゝにまで到らしむるの方便にすぎない。

○だから厭離穢土、欣求淨土と云ふことは此の意味に於て即ち佛の方から云ふことであつて多くの凡夫の方からはその實仲々に本當の事は判らない。従つて凡夫の方から云ふ厭離穢土、欣求淨土は其の

言葉は同じであるけれども、その實は餘程用心を仕ないと反つて其の眞實の意を誤まることになる。○何となればそれは前にも云ふやうに、凡夫の考へは多くの場合、私利と私慾の満足できない所を以て、反つて厭い、反てそれを以つて不幸と思ひ、さうした世界を娑婆と思ひ穢土と思ふことが常であり、之に反して煩惱の満足のできる世界を淨土と思ひ極樂と思つてゐることが多いからである。

六 從來の厭欣心

○して見ると從來の厭欣心と云ふものは此の際今一應の深き反省を要しないと、ともすればかうした大きな誤りを我知らずやつてゐることがないとは限らぬ。否現に從來の多くの人々はかうした考への人が多いのであらう。そして又今日の多くの人々の考へもかうした考への人が多いのではないか。

○その證據には此の現實の世に於て、多くの人々が淨土教に多く歸依した時代を見れば主として、其の時代の人々が社會の生活に堪えかねて、此の世に自分の煩惱を満足することのできなかつた時に多いのである。だから之に反して此の世に自分の私利と私慾とを充たし、自らその煩惱を満足することの多いときには其の往生淨土を求むる人も少いものを以つて知るべきである。

○して見れば此の世に於ける多くの人々の厭欣心と云ふものは今日のところ未だ甚だ信用にならぬものが多いのであつて、之は常に私共の大きい反省を要する所である。

○従つて私の心には昔の淨土教の隆盛も未だ信用にならず、又それかと云つて今日の淨土教信者の少いのも悲しむに足らぬのだ。

○それは今も昔も未だ多くの民衆は眞の淨土教を知らないのであつて、眞實の淨土教は愈々之からであると思ふからである。

□私の昨今は全く讀書と思索との外に何も無い。乍然それれも昨年以來の私の著述の準備に過ぎない。一家もそれの爲めに全力を注いでくれる有様である。乍然過ぎて見れば一年の速さよ、それは全く夢のやうである。而もあまりにもその學業の遅々として進まぬのは驚くの外はない。

□初めのほゞは己に十年この方、書きたいことも略まとまつてゐるし、愈々筆をとりかけたなら半歳もかゝらんで二冊はできるだらうと思つてゐた。従つてその準備に二二年もあてゝおいたならと思つたのが、この分ではさうたやすくは仲々に行かないものだと思へて來た。それは勉強すれば勉強するほゞ一つの單なる事柄でも仲々に深いものがあるからである。

□然に昨年の秋の末であつたかと思ふ、或る人の哲學行脚と云ふ本の中に、彼の有名な佛のベルグソンの話が出てゐたが、彼が自分の著述の爲めに當時大學の教職を去つて、専心そのこゝにとりかゝつてゐると云ふことを知つて、さすがに偉人の學風の高きを知つた。而も尙彼の語るところによれば、彼は第一の著作（意識の直接與

伴について）を公にする前に數學と心理學とを研究し、第二の著作（物質と記憶）を書く爲めに七年間も生理學と病理學とを研究し、第三著作（創造的進化）を書く爲めに十年間も生物學を研究したと云つてゐる。而も今度の著述については更に最後のものとして、自ら大學の教職も之を廢し、更に人々の面會も多くは謝絶して、その準備にとりかゝつてゐると云ふことを知つて、さすがに私は赤面したことがある。それに比べて私の二三年はあまりにも短いからである。

□多くの道友の人達は私が一二冊の本を書くのに半歳もあつたらばとの事である。そして私は余程の余裕をと思つてとつたのが二三年である。然に此のベルグソンの態度は己に一書を著はすに、七年、十年の研究を要し、更に今度の彼の著述は正に一生を獻ぐるの態度である。私はいさゝか私の行動の甚だ輕々たるに恥ざるを得なかつた。

□而て彼は又記者に向つてかう語つてゐる。「自分は書を書く以上は他人の未だいはないこと、又いへないことに觸れなければそれは無意義と思ふ」云々、そして此の考

へは全く私の考へと同じである。さすがにベルグソンは偉いと思つた。カント曰く、ヘーゲル曰く、と人の云つたことのみを擧げて余も亦斯の如しと云ふ位の本ならば毎日でも二三冊の本を書くことは何でも無い。

□それに私は初めて東京に上つた當時であつた。彼の有名な世界的物理學者の長岡半太郎氏のお話を聞いたことがある。そのの曰くに「諸君若し諸君が本當の人とならうと思ふならば、人のできない世界的偉業をすることだ。たとへば一つの本を書きにもだ、誰がかう云つた、彼がかう云つたと、人の云つたことばかり集めて本を書くならば、二千頁でも三千頁でも一日の中にできるのだ。だか僅に一頁か二頁かの報告にさへ、何十年と云ふ歳月と努力によらねばならぬものもある。否、眞に千古未發の眞理を發見して之を天下に發表するには、その結論として僅に二頁か三頁に過ぎないものが、反つて之を爲すには實に十年、二十年の苦心慘澹を要するものが多いのだ。それは恰も何十萬貫と云ふ大な岩石を打ちくだいて、而も莫大な時と費用とを拂つてさへ、實に僅少のラヂウムしか得られないやうなものだ。而もそれがまた何千萬貫の岩石にも勝る得物でもあるのだ。諸君眞の多い定價の安い本のみを讀むのが偉いのではないぞ」と聞されたことがある。

□私はその時之は全くだ、實にそれに違ひないと同感だつた。そして私は思つた、凡そ人と云ふ人に生れて來て一体吾人は何を爲すべきか、若しそれ人として眞に仕事をするならば、正に千古未發の大業をこそ爲すべきである。而てその大業たるや正に之の獻身の事業でなくてはならない。然り獻身の事業それは一体何ものであらうか、之恐らくは今私の求めてゐる宇宙の眞理を發見して、一切の人類をして神の如き生活を此の土に實現せしむるの仕事であらねばならぬ。

□それこそ全宇宙を分折して、その中からの眞實の生命をしばりとり、あらゆる人々に此の神の生活、即ち佛の生活を注射する事である。

□而て今の私のこの事業は、まさに此の意味に於ける前古未發の大業でなくてはならぬ。

□此の頃英の文豪バーナード・セウが社會主義と資本主義と云ふ一冊の本を書いたが、彼はその爲めにあらゆる讀書と思索をつゞけて、その爲めには社會的交際や、その他新聞雜誌に筆とることまで止めて、六年の歳月を之に費したと序文で知つた。

□之に比ぶれば私の二年や三年の傳道中止は問題でない。私の眞生誌や光明への執筆が思ふに任せぬのも當然である。私が各地への外出を止め、面會も斷つて専心勉

學に力を注ぐと云ふことは之も亦止むないことである。
 □忘れもせぬ昨年の初夏のことだつた。あの豫言者宮崎虎之助が、自ら重患の床にあり乍ら一切の仕事と面會とを退けて、専心自らの著述にかゝつてゐるのを見たことは、そして彼は其の著述を終るや間もなく豫言の通りに此の世を去つた。

□乍然彼は實に望みの通りに自らの書を殘して、永劫に安任の世界には入つた。而て彼の著述は正に彼に於て古今獨歩だ。彼でなくては誰でも云へない所だ、彼は正に自分の思ふ所、感ずるところ、仕たいまゝのことをなし、言いたいまゝのと言いつくして此の世を去つたのだ。人誰か彼をして自由人と云はない人があり得やう。

□否已に彼は自らを神だと云つてゐる。否一切が已に神だと云つてゐる。そして自分は已にその神の生活にある

兎の一生

東 光 生

私の家に一疋の兎が居りました、それが昨晩死しました。そこで私は今夜になつて之を水葬にして今良子の病

ものだと云つてゐる。言ふことも爲すことも彼の心には自ら神の生活であつたのだ。

□友よ、さうか私の仕事をして自由ならしめよ、私の仕事は今や私一人の仕事ではない。自他共に眞に生くべき眞人の生活であらねばならぬ。

□そんなものが出きるか他から見れば實につまらない。僅かに數頁に過ぎないものかも知れぬ。乍然頁の多い値段の安い圓本のはやる今日だ、恐くは私の書いたものなさは見向きもしない人が多いかも知れない。

□それでも私はやるつもりだ、死んでの後幾千年誰か私と心を共にする人がないと云へやうか、私はたゞそれのみ待つて書くべきだ。有象無象の百萬の人よりも、たつた一人の釋迦やキリストがいかに偉大に、いかに力強く此の世に光つてゐることだらう。(四、九、一八)

室にまで歸つて來たころであります。そして色々のことを兎公について考へさせられたところでもあります。

思へば兎公が私の家に來ましたのは今から百日ばかり

前の五月の末でありました。彼は信州の澁の温泉寺の門前で生れた。初めから家附の兎の子でした。私が彼地に勉學の爲めに居ました頃、私の子供の爲めにと云ふので貰つて來たものであります。

「美智子さん、こゝのお寺の門前のおばさんところに兎さんの子供が何匹もゐます。一匹おもらいして來ませうか、皆で可愛がつてやりますか、良子さんや、光道さんもきつと喜んでくれるでせうね。」

こんな手紙を私が澁から東京へ出したのは五月の中頃でした。生き物を飼ふことは道としてさうかとも思ひませんでした。殊に子供の爲めとは云へ、一匹の動物を人間の爲めに遊びものにするに云ふことは考へものである。それにいつまでも可愛がつてくれればよいが、子供のこと故すぐ飽きが來るかも知れない。そんなときに其の生き物の所置に困りはしないか、それならば今から止めた方がましかも知れないと、こんなことも考へましたが、あの純白な小兎の美しい姿を見ると、その純な姿とやさしさがビヨーン／＼はねまわる。その元氣さと併せていかにも可愛くてなりませんし、それにこんなやさしい動物を家庭に入れて、自分の子供のお友達にすることはそんなに一家に和らぎの心を持ち來たすことだらう。朝も早くから「兎さん」と云つて皆が早起し、小供が皆でえさな

ともやるならば兎公の生活は此所に居るよりも幸福に違ひない。それに私たちが之を飼はないからと云つて、此處で自由に育つのではない、そのうちには誰かに賣られて、やがては殺されて皮をはがれるのにきまつてゐる。そうしたならば今之を私の家へ暫く飼つておいたとて、兎公自身の生活には必ずしも不幸とは云はれない。それに若しも子供達にあかれるやうな時が來たならば殺すも惜しい、捨てるのもすまぬからその時はまたもとの舊巢へ歸へせばよいと、さうとう貰ふことにして私の家につれて來ることにしたのでした。

「お父様 はやく兎さんをつれてきて下さい、皆なで毎日まつてます。きつと可あいがつてやりますから。」と三人の子供の連名で求めて來た手前もあり、小さい厚紙の箱に入れて持つて歸つたのは、それから間もない五月の末でした。

二

初めて持つて歸つた時、兎公の姿を見て三人の子供が喜んだのはとても想像の外でした。中にも次女の良子の喜びはとても仕やうのないほぎでした。

立派と云ふほぎではないが、私は兎公の爲めに一つの箱をこしらへてやりました。地べたにも置かぬやうにして家のうちに置き、時々箱からも出して一家で之を樂

しました。おこなし鬼公の生活、彼としては朝から晩まで食ふことと、はぬまわると云ふ事より外には何の仕事もありませんでした。而もそれだけで、私の一家はそれだけ喜ばされたか知れません。

その爲めか一家も一層賑つて来たやうでした。一にもうささん、二にもうささんで私の家では誰一人「ウサギ」なごとなを呼びすてにする人もありませんでした。そして鬼公をとりまいて皆が喜々として喜ぶさまがまるで天國のやうでした。子供の心に動物を愛する心がこれの爲めにこれ位養はれたか、今まではたゞ愛せられることのみしか知らなかつたと思はれたところの此の子供たちの心には更に進んで自ら之等を愛するの心として、非常な至純の愛の芽がそれによつて成長して行くのを見ることのできました。

時には箱から耳をつかまへて庭先に出してやつたり、又朝夕さなく新しいえさを與えてやることも、多くは子供等の仕事でありました。

三

かうして十日たち、二十日たち、一月、二月と立つにつれ鬼公めきめきと大きくなり、昔のやうな子供の姿ではなくなりました。そして箱にも殆ど一ぱいと云ふほごにもなりました。そしてまた子供の心にはそれが毎日の

習慣となるにつれて、前のやうには珍らしくもないやうになりました。そして朝夕の出し入れ新しいえさの買込み、それに毎日の鬼公のおさうぢが多くは小供のお母さまときぬちゃん(家の女中)の仕事になりました。

雨が降つたり、家事が急がしい爲めに鬼公の手入れを怠り、その爲めに時々家中がくさい臭で困ることなごもあつたり、時には鬼公がひきりで箱から飛出したり、犬や猫がたかる時なごもありまして、少々もてあます時さへあるやうになりました。殊に此の八月は私共皆不在の爲めに鬼公は、たゞきぬちゃんのお世話になつて淋しく暮すこもあつたのでした。

そして時々困つたなあ、いつそ誰かにくれてやつた方がよいかも知れんが、殺されるのもいやだし、溢に歸すのもおつくだし、誰か貰つてくれる人もないものかと、鬼公に對してすまぬ氣のする時もありました。

八月の末に一家は溢から歸りまして、鬼公の世話もしましたが、何故か子供たちも、初めに鬼公を見たときほごには之を可愛がりませんでした。尤も憎むなごの心の起らう理もありまんが、之は主として子供の好奇心によることでありませう。

四

ところが五日の朝から良子が病氣になりまして、六日

の夕方には入院せねばならぬことになりました。一家はまるでその爲めに一切を放擲せねばなりませんでした

従つて鬼公の手入れも殆ど手遅れ勝ちでした。それでも毎日注意は充分にしたつもりですが、あまりに急しい時は二度位は夜も遅くまで家のうちにも入れないことがあつたり、時には半日えさをやらなかつたり、或は二三日も箱のさう除も怠ることがあつたかのやうでした。

或る日の夕「何だか鬼公が元氣がないやうです、病氣ではないでせうか、さうもいつもよりか違ふやうです。」と留守居のばあやが私につけたこともありました。が、「それはいけないね、或はえさでも充分にやらない事でもなかつたか、それともあまりに外にばかり出しておいて夜も遅くまでとり入れない爲めではないか、さうかそまつにしないやうに。」と私からも注意させたこともありました。

「鬼公はケガしてゐますよ、耳のところから血がでてゐる。益々元氣がないやうです。」と今度はきぬちゃん知らせました。

「それはいかん」と私もよく見たがなるほご左の耳が何ものかにかまれてゐる。そして尙よく見れば右の足もいためて居る。それに三四日良子の病氣で箱の掃除もしてないやうだ、之ではいかぬと私も心配したが、さうも可

なりに重傷でないかと思はれました。

かうなつて見ると、あんなに美しかつた鬼公も今は反つて穢い臭いと姿となつてゐて、子供を近づけるのも衛生上にさうかと思へて、鬼公には氣の毒だが子供から遠けました。かくて幾日かを過ぎました。私は日夜良子の爲めに病院につめきり、家のこと等全く忘れて居りましたが、昨晩は舊の八月十五日所謂明月と云ふので靜に庭先からそれを仰いで、秋の明月を喜びましたが、今朝家に歸れば「鬼公が昨晚死にましたよ。」との報せでした。「何に鬼公が死んだ？」と私の心に驚きの心が起きました。又すぐと安心の心と更に一種の喜びとさへあはれと思ふ心の中に現はれました。

五

「鬼公が死んだのか？」可愛さうな事をした。今少し手入れをしてやつたらば、あゝしたけがもさせんですんだ事だらうに、犬か猫かは知らないがあれほごのけがをするまでに、耳と足ををかまれるにはあの正直な鬼公にはさぞその襲撃には驚いたことだらう。そしてまたその爲めにどうとう死んだと云ふことは、それだけ体もつらかつたにちがいない。それにあゝして何一つ泣き聲も出さず、たゞもくもくとしておとなしく、病床の中に此の世を去つたと云ふことは、何と云ふ痛ましくも亦衷は

な事だらう。

生きんとする我等の前途に、かうして死が突然に襲て来る。生者必滅とは佛者の教えとは云ふものゝ、多くの人々はいつも此の死を忘れるのが常である。乍然死はやっぱりかうして突然にも来るのである。兎の死、それはまたやがて私共の死でなければならぬ。兎のみが死ぬのではない、それは一切の生物の死、そのものだ。そしてそれはまた私共の死でもあるのだ。あすは子供(良子)の退院日、一家の上には限りない喜びの一日ではあるが、此の兎公の死は又悲しみの一つである。死！死！即ち兎公が死んだと云ふことは、私には此の死！の驚きを痛切に與えられたのであります。

でも彼の死は一面私には嬉しい事でした、そして私には又一つの安らぎが一時に私の胸に現はれて来たのでした。それは外でもありません、兎公の死は一面彼にとつては上なき仕合せであつたかとも思へたからです。殊にあゝして耳も足も損けられ、体も弱つて姿も醜く、今更他人の家に行つたとて、決して私の家以上にもてはやされやうとも思へぬ。従て今となつては反て死の方が仕合せであつたかも知れない、そしてその方が私の一家も安心だ、今まであゝして手入れして来ただけに人に渡されず、かと思つて今のなりでは手入することも已におつく

だし、寧ろ死んだ方が仕合せであつたと思へたからです。

それに昨夜は明月だ、丁度月見の晩として私も心ひそかにあの月を眺めた晩だ。兎公とお月様とは昔からつきものだ、月の中のある兎、殊に秋の夜の明月の中の餅つき兎、家の兎公はお月様の世界に歸つて行つたのではないかとさへ思はれた。ほんとうにあの兎さんきつと昨晚、月の世界に歸つたのであらう。なつかしくもあはれに、又一層に私の心を引く兎、私には一つの限りない神祕の事だつた。

「兎公は死んだ！」と私の一家は皆かう云つて、その別れを惜しみました。死、死、それは單なる悲しみの死ではありませんでした。私の一家ではその兎公を弔ふ充分の誠意と同情さが、此の言葉の中にもつて居りました。三人の子供はお母さまの指圖で如來様の前に御供物をさゝげ、お念佛を申させて頂いたと聞きました。

涙一つ流す死ではありませんが、それでも此の兎公の死は決して單なる無意義の死ではありませんでした。

此の夕、私は之を新聞紙につゝんで糸でくくり、或る川の橋の上から之を水葬に附しました。私の家を出ると、美智子と光道と私の妻は方關まで出て来て、「さようなら」と兎さんに別れをつけました。「お念佛を稱へてあげて下さい、如來様の前にお線香をあげて」と申し

て私は家を出ました。

今頃はもう彼の死体は川を流れて遙か海の方へ送られてゐることでありませう。乍然彼の一生は私共の一家の上に大きな印象を残して行きました。否それは單なる一つの印象ではありません、實はまたとない尊い經驗を永く私共の一家の上に與えて行つたのであります。

「兎公有難う、君のおかげで僕の一家はどれだけ大きな恵みを受けたか知れない。少くとも僕の子供はお前のお蔭で、深い生物に對する尊い愛を覚えさせられた。そしてまたそれによつて心から喜ぶ子供に、僕達夫婦はどれだけ幸福を感じたか知れない。君は僕の家

吾朋

便り

○大森藤吉様より

貴社御發行の眞生を拜讀して頂だし、上人の聖教を説かるゝに當り、機に隨がへて法を説き、病に應じて薬

を興へらるゝと同じ筆法にて、徳生に乏しき罪深き拙生の如き低級の者にも、大我の眞を興へられ即ち智徳圓滿の光明に

依り、稍々佛心の發露を見らるゝ事と思

へば隨喜の至り只精進罷在候

土屋上人へ宜敷御鳳聲申願上候

乍失禮切手代に御領收被下度候

○眞生を愛する一人より

拜啓 前略眞に勝手ながら眞生の本はカナがつけてない故、無學の者として分らぬ字もあり、近所の人にお貸してもカナがつけてない事さて、少々不便致してい

は全く一つの恵みであつた。その意味に於て君は自ら知らずして佛行を行つたのだ。兎公有難う、僕は衷心から君のこの厚恩に感謝する——。

之が私が兎公に對する最後の言葉であつた。口にこそ出さないが、私の心はかうして兎公に感謝した次第であります。

兎公と一口に言ふけれど、私にはそれが佛の使いかたさへ思はれる。否或はそれが佛の御姿だとさへ私の心のどこかに教ゆるものさへないではありません。萬有の上にかうして如來の御光が輝いて来たのを覺ゆるやうです。(四、九、一九、良子の病室にて、東京病院内)

夜十二時

ます。頁は少ななくても良く讀めたらごんなに助かるか知れませんが。願へます事なら、どうぞカナを願ひます。一人も多くの讀めたら眞生を生かす元と存じます。

○津島 中野善英様より

唐澤山では御指導を有難う御座いました。矢張り怠けてゐて期待して登つた程の精進もなく、お愧しい事で御座いました。而し歸つてからは一層一生懸命に法

事に精進せられて、トングダ晩時効果で御座いました。厚く御禮申上ます。

私も只今九月號の原稿を書いて送りま
す。眞生も發行日を事實月初めの一日頃
にし、それとも毎月遅れぬようにしたい
と思ひます。

眞生がダランなくなるまで一般の人々の
気分がダランなくなり、随分大きい影響
を興へてゐると思ひます。(下略)

○東京 土屋親道

□愈秋の時候となりました。道友には御
變りも在らせませんか遙に御案申て居り
ます。次に私共の方では今春美智子の病
氣以來、一同皆無事でありましたが、こ
ゝ二週間計り、又しても良子の病氣で一
家病院生活の有様となりました。でも手
遅しなかつたこの事で、大事に至らんで
済みました。こゝ二三日で退院のこと、
存じます。乍他事御休心のほどを願ひ上
ます。

□その他は無事、之も如來の賜喜んで
居ります。それに時候もよい事とて、私
は病室に良子を看護し乍ら、夜も遅くま
で獨りで勉強ができますので喜んで居り

ます。いつも家を明けてばかり居ります
私には、時々まかうして子供の看護する
ことが親子の親しみを一層覺えて、いつ
にない子を思ふ親の心が、しみじみ味
はれてなりません。之も亦如來の恩寵で
す。

□次に此の夏の唐澤では一同近來にない
喜びの集りでした。其の時道友の望みさ
して、私が再び昨年以前のやうに各地傳
道に出ることを決議されましたが、之は
主として、私の前途と道友の將來を思ふ
ての、いと深い道友の厚意によるもので
ありました。

□乍然それは私の初めからあづかり知ら
ない事柄でありまして、あまりにもそれ
が突然の出来事でありましたので、私も
全く面くらつた次第でありました。それ
でもそれが私の行動に對して、一面には
世間の誤解を防ぎ、更に一面には私の自
由の行動のされる爲めかと思へば、道友
の熱心に對して急に反對もできませんで
した。従つて私が直にそれに賛成はでき
なかつたが、それにしても其の道友の限
りなき厚意に對して、感謝したことはも

こよりでありました。
□然し乍らそれにしては、私としては、こ
ゝ一二年、今までの通りに勉強したいの
が山々でありました。それに己に昨年か
ら、二三年と云ふ豫定のものに、あら
ゆる仕事を差おいて、其の著述の準備に
さりが、つて居る際でもあり、又一面に
は己に此の事を一般の道友にも發表した
ことでもあり、且又その理由によつて或
る道友の援助も受けて居ることでもあ
り、之等の方面の人々の了解も得ないで
は折角の道友の厚意もいかゞかと思つた
ので、其後二三の人々にも計り、又道友
の一二にも了解を得て、やはり事業は昨
年のまゝのつゞきとして、其の代り昨年
よりも少々多くの時間を道友の訪問な
り、信仰座談の集りに出たらどうかと云
ふことに致しました。

□然それだからと云つて、必ずしも昨年
以來の勉強を差おいてまで、従前のやう
に出あることと云ふことは、今暫く御許し
を願ひ度存じます。でも是非にも都合じ
て出て来いと云ふ御望みならば、どうか
御遠慮なくその旨を私にまで前以つて御

一報を願ひます。すすれば私の都合の出
来る限り、勉強の合間に心氣轉換の一助
として、何とか都合のできるだけ都合を
したいと思ふからであります。

□尤も二兎を追ふものは一兎を得ず。と
云ふ昔からの諺もありますから、此の際
私としては全心を昨年來の著述に盡した
いと思ひますが、その私の心だけはどう
か御許を願ひたい。此のことは私一生
の願ひ少くとも、十數年來の願ひであ
りますから、どうか道友のなげとして
私のこの心の願ひを許して頂きたい。

□かく申せば私がわざと今夏道友の望み
を退け、折角の幹部の衷心からの厚意を
無視するかも知れません、それは決して
そんな心で、はないのであります。否、
それどころか吾が眞の道友なればこそ、
かくまでも道を思ひ、友を思ひ、私のや
うないたらぬもの、爲めまでも思つて頂
いた事である、深く感謝しておるこゝ
ろであります。

□尙私の勉強の仕方については可なりに
全力を盡してゐる次第であります、好
事寛多しとはこのことでありませうか、

豫想と實際とは可なりに大きな隔りがあ
りますが、それでも、家を擧げて其の方
へと全力をつくして居るのは事實であり
ます。乍然その研究の範囲があまりに廣
いので、仲々に其の効果を収めること、が
できません。

□従つて一時は眞生誌の方も、その爲
めに發行を中止しやうかと思つた位で
ありました。それでも、この眞生誌によつ
て、お互の交情も温め、又信仰も幾分進
めることができるかと思ひ、そのまゝに
しておくことになりました。それでもや
つぱり之の雑誌の爲めに毎月四五日以上
は、どうしても費やます。其の他多くの道
友の盡力で印刷をしたり、發送をした
り、それには可なりの人知らぬ多くの時
間と費用も入ることですから、どうか道
友の御熱讀を願つて止まぬ次第でありま
す。

□尙之は平生からの御願ひでもありま
す、此の際各位の信仰なり、疑問なりを
此の誌を通じて發表して頂きたいこと
であります。もこより發送の全部を總て發
表することば、或は紙面の都合上できぬ

こどもあるかも知れませんが、成可く
之を誌上に發表して共に味いたいと思
ふのであります。(四、九、一七)



私ほど不幸はナイと思つてゐます何
が不幸です。
まだ生きさして貰へてゐるだけ無
限の幸福ぢやないですか。

死なして下さらぬのは、まだ其不幸
から轉回させようとしてゐられる
からです。
そう氣落ちせずにもう一度踏張つて
みませう。
吃度新世界が展開します。

佛の心は人の上に現はれて居ります。
彼の人の心の上に
私の心の上に――

誌代並寄贈御芳名

- 參拾錢
 - 三 重 上富助太郎様
- 壹圓
 - 四日市 恒川 蕪一様
 - 岐阜 粟野 準一様
 - 全 島本 長雄様
 - 大阪 小越 東一様
 - 全 小間場清作様
 - 全 岩阪 正一様
 - 全 大山 政子様
 - 全 酒井 又治様
 - 全 小林 凸様
 - 高崎 櫻井 三上様
 - 全 國峰 かく様
 - 全 三橋 博様
 - 全 實樹 感學様
 - 奈良 今井 三造様
 - 上諏訪 淺野 千代様
 - 全 芦田 芳子様
- 貳圓
 - 全 安藤 百重様
 - 全 有賀 ひで様
 - 全 柏崎 會田 証様
 - 全 小澤啓太郎様
 - 全 石黒 武夫様
 - 全 新潟縣 佐野 秀雄様
 - 全 山賀 實三様
 - 全 種岡 イト様
 - 全 柏崎 光 應 寺様
 - 全 三重 戸崎 潔様
 - 參圓
 - 東京 名和 耕藏様
 - 全 島田利三郎様
 - 壹圓八錢
 - 長岡 大森 藤吉様
 - 壹圓
 - 東京 矢崎とし子様
 - 名古屋 西脇 賢吾様

七二八

大正十四年八月十三日
第三種郵便物認可

昭和四年十月五日印刷納本
昭和四年十月十二日發行

(毎月一回十二日發行) 第八卷 第八號

價定誌本
一部 金 十錢 郵稅共
半年 金 六十錢 全
一ヶ年 金 一圓 全

註文の注意

- 購讀希望者は代金を添へて御申下さい
- 誌代は總て前金御拂込の事
- 送金は振替によるのが便利
です

昭和四年十月五日印刷納本
昭和四年十月十二日發行

東京市芝區芝公園十四號地九番
編輯兼 土屋 觀 道
發行人

名古屋市中區隅田町二一番地
印刷人 百々 治之助
電話西(5)二九三番

名古屋市中區鍋屋町二丁目
印刷所 藤山田活版印刷所
電話東(4)三六六・三五五

東京市芝區芝公園十四號地九番
發行所 眞生社
振替口座東京四七二八八番